

第 50 回日本母性衛生学会

演題： 0 歳児に対する母親の寝かしつけ方略について(3) —抱っこ方法別の母親姿勢安定性と子どもの状態について—

演者名： 山下泰子・黒石純子・斉藤哲

所属： ピジョン株式会社 中央研究所

【目的】母親が普段使用している 3 種類の子守帯を用いた抱っこ姿勢時の、母親の姿勢安定性、乳児の行動や状態、母子間距離について明らかにすることを目的とした。【方法】対象：P社モニター制度に登録している母親 11 名。母親の平均年齢 32 歳、平均身長 159cm(範囲:149-168)、児の平均月齢 9.2 ヶ月(範囲:6-15)、児の平均体重 9154g(SD=1066)。手順：母親のみの直立姿勢の観察後、乳児を素手および子守帯で抱っこした場合の観察をし、側部よりデジタルカメラで撮影を実施した。観察時に重心動揺検査システム(ニッタ社製)にて、母親の重心動揺を測定した。倫理的配慮として、事前に研究目的等を説明し母親から文書同意を得た。【結果・考察】重心動揺検査の結果、荷重中心の移動距離の短い順に、クロスタイプ(ひもをクロスさせ支えるタイプ) <リュック式(袋状の中に児を入れるタイプ) <素手 <ホルダータイプ(腰片側で支えるタイプ) となった。撮影画像から児の保持高さを分析したところ、素手 >リュック式 >クロスタイプ >ホルダータイプの順に高く、母子間角度を分析した結果、ホルダータイプ >クロスタイプ >素手 >リュック式の順に大きくなっていった。今後、姿勢安定性が母親の疲労度合いや子どもの落ち着き度合いに及ぼす影響について詳しく検討していく予定である。